

その鉄の塊は確かに私のバイクなのだが、廃棄物と間違われることがよくある。タンクは凹み、シートは破れ、錆だらけでとても実働車には見えないが、一応は動く。二〇年超えの高齢車を高齢者である私が運転するのだから速くは走れない。町で自転車に抜かれるのは毎度のことだ。舗装路でのあまりの遅さに私は「チッ」と舌打ちしてしまう。

—ところがだ。国道から林道に分け入り、路面が厳しいダートに移った瞬間、この鉄くずが「鉄の馬」へと激変するのだ。車一台がやっと通れる曲がりくねった急坂を、大径ブロックタイヤでずんずん登る。石も岩もバンバン踏み越え、二〇〇ccシングルエンジンは控えめに吠える。熊が慌ててブッシュへ逃げ込む。母猪に続く五匹のウリボウたちと駆けっこする。木立の間からアルプスの大パノラマが開ける。倒木に乗り上げて横転する。

そしてこのオフロード車は、自動車の半分の時間で、三分の一のガソリンで、標高千メートルを超える峠まで私を運んでくれるのだ。

例えばある人は、余暇の時間、繁華街の賑わいの中に身を置くことに喜びを感じるという。それと同列に、私は深遠の森でひとり時を過ごすことを至上の喜びとする者だ。

寂として奥深い風景。冷えて清浄な山の空気。沢の清冽な流れ。幽邃閑雅の空間は、私にやすらぎよりも、むしろ恐怖に近い感覚を抱かせる。神気を全身で感じ取ると言ったら嘘くさいか。神秘体験と呼ぶほどのものでもない。ただ心の奥深くを強く揺さぶられる。

さて、聖人ではない私はすぐに欲望の人と化す。岩魚と山菜が私を呼ぶのだ。釣竿を片手に崖を登り、はっと息を飲むほどに美しい淵を愛でる。急傾斜を伝い、タラの芽やウドに手をかける。—ひとりであること。危険な単独行だから死を意識する。死を意識することから樹林や溪魚の美しさが胸に迫る。そんな非日常の世界へと私を誘ってくれる鉄の馬は、二十数年来の私の大切な相棒なのである。